

あしがら山のものがたり

西山 敏夫・文 菅原 運彦・絵



民話の絵本

あしがら山のものがたり ㊥ 550円

昭和46年2月20日 第1刷発行

著 者 西 山 敏 夫

発行者 浦 城 光 郷

印刷所 東 峯 印 刷

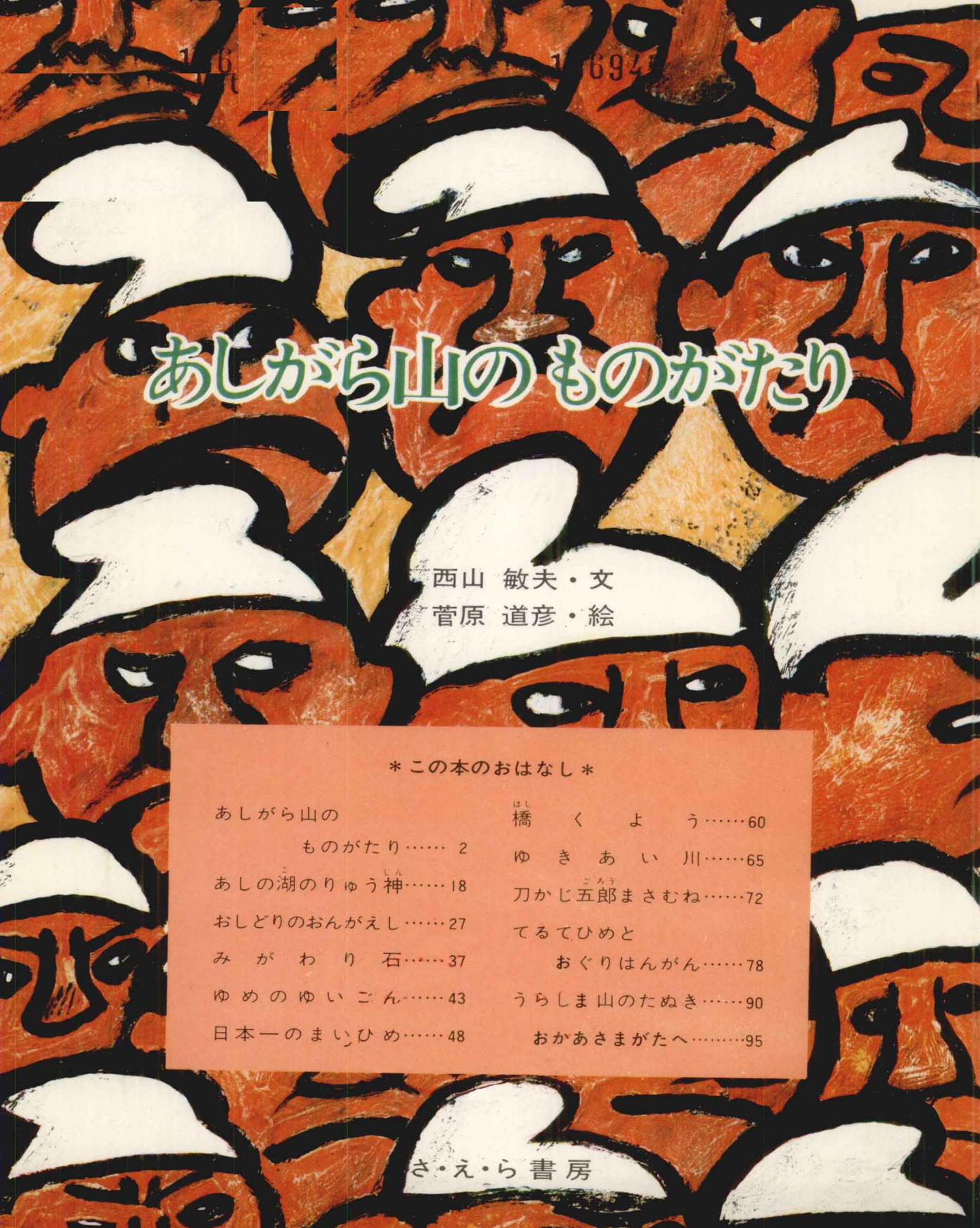


発行所 さ・え・ら 書 房

東 京 都 新 宿 区 市 谷 砂 土 原 町 3 丁 目 1
電 話 代 表 03(268)4261 振 替 東 京 87244

NDC 388

8339—2011—2708



あしがら山のものがたり

西山 敏夫・文
菅原 道彦・絵

* この本のおはなし *

あしがら山の	はし 橋	く	よ	う	……60
ものがたり…… 2	ゆ	き	あ	い	川……65
あしの湖のりゅう ^{しん} 神…… 18	刀	か	じ	五郎	まさむね……72
おしどりのおんがえし…… 27	て	る	て	ひ	めと
みがわり石…… 37	お	ぐ	り	は	んがん……78
ゆめのゆいごん…… 43	う	ら	し	ま	山のためき……90
日本一のまいひめ…… 48	お	か	あ	さ	まがたへ……95

あしがら山のものがたり

ちからもちの子

あしがら山は、さがみの国（いまの神奈川県）とするがの国（いまの静岡県）の国ざかいにそびえる、はこね山の北にある山です。

もとは、「あしかる山」といったそうです。そのわけは、この山のすぎの木をきりとつて船をつくったところ、ほかの山の木でつくった船とはくらべものにならないほど、船が、かろやかに、はやくすすんだからだということです。

大江山のおにたいじで名高い、みなもとのらいこう（源頼光）が、まだおにたいじをしてないまえのこと、このあしがら山のとうげを、こえたことがありました。

らいこうは、しもふきの国（いまの千葉県の一部）の国司といって、その地方をおさめる役人のかしらでした。つとめがおわたので、みやこへかえるとちゅうだったのです。らいこうは、けらいたちをつれて、けわしいあしがら山をのぼると、とうげの上で、

ひとやすみしました。四方のけしきをながめていると、四、五キロメートルはなれた、南のほうの谷間から、お湯でもわかしているのでしょう、けむりのたちのぼっているのが見えました。

「あんなところにも、人がすんでいるとみえる。こんな人かげもない山おくにすんでいるところをみると、さだめし、つよく、いさましいものであろう。だれかいって、ようすを見てまいれ。」

「はい、かしこまりました。」

わたなべのつな（渡辺綱）という勇士がかけました。

みねをつたっていくと、高い山がありました。けむりは、そのふもとからたちのぼっているでした。つながおりにいくと、一けんといえがあつて、おかあさんと子どもがすんでいました。

その子は、まだ、やっと五つ六つなのに、せいも高く、よくふとつていて、まるで生きたにおうさまのようなたいかくでした。あそんでいるようすを見ると、大きな石をかがるもちあげたり、大木を手でたおしたり、たいへんなちからもちでした。

つなは、さっそく、おかあさんにあつてすすめました。

「たいしたお子さんだ。わしのご主人は、みなもとのらいこうというたいしょうだが、その子をらいこうさまのけらいにする気はないか。おとなになったら、さぞ、りっぱなさむらいになるだろう。」





「らいこうさまのぐけらいになれるとは、こんなしあわせはございません。」

おかあさんは、よろこんでたえました。つなも、せっかく、ここまでたずねてきた
かいがあったと、よろこびました。

こうして、この子は、このときから、みなもとのらいこうのけらいになりました。

さむらいは、じぶんのつかえている主人しゅじんのことを、公きみといいます。それで、主人しゅじんにつ
かえるとき（時）がきたというので、この子は名を公時きんときとつけました。また、いえのあ
るところが、坂田さかたというところだったので、坂田公時さかたのきんときと名のりました。

みやこにのぼった公時きんときは、やがて、らいこうの四天王してんのうといって、とくべつにつよい四
人のけらいのうちの、ひとりになりました。そして、らいこうが、大江山おおえやまのおにの、しゅ
てんどうじをたいじしにでかけたときには、おともをしていって、たいへんてがらをた
てました。

名高い、あしがら山の金太郎きんたろうのむかしばなしは、この坂田公時さかたのきんときの、子どものころのこ
とが、おはなしのもとになっているのだそうです。

金太郎きんたろうは、山おくの一けんやにすんでいたのですから、ともだちはいませんでした。
そのかわり、山のどうぶつたちが、みんな、なかよしのともだちでした。

金太郎きんたろうは、おかあさんから字じをおそわりましたが、それがおわってから、ともだちの
どうぶつたちと、あそびにいきました。まさかりをかついで、くまのせなかにまたがり、
うさぎ、さる、しかなどをつれて、

「はいどう、はいどう。」

と、でかけました。

草のつるでつなをつくって、ひっぱりっこをしたり、かけっこをしたり、すもうをとったりしました。ちからのつよいのはくまです。でも、そのくまより、もっとつよいのが、金太郎でした。くまは、ころり、ころりと、なげられてしまうのでした。

金太郎のともだちは、けものだけではありません。川のこいともなかよしでした。あるとき、こいが、水からとびだして、川原で、ぱたぱたはねていたところを、水にかえしてやったことがあります。それからなかよしになったのです。

金太郎が手をたいてよぶと、こいは、いつもふちからでてきました。このこいは、ぐんぐん大きくなって、金太郎をせなかにのせて、水しぶきをあげながら、川をさかのぼったりしました。

つるにぶらさがって、えだからえだへとびうつることも、金太郎はじょうずでした。あちらのえだから、こちらのえだへと、とびうつるのです。さるたちが、びっくりするほどでした。

金太郎は、ときどき、おむすびをたくさんこしらえてもらって、どうぶつたちと、とおくへあそびに行くこともありました。そして、そのおべんとうを、みんなでわけあつて、たべるのです。

ある日のこと、ふかい谷川に橋がないので、むこうぎしへゆけないでこまりました。



「なんでもないよ。」

金太郎は、まさかりをそばにおくと、大きな木にりよう手をかけて、うんうん、ちかちかをいれて、どすんとむこうぎしにおしたおし、一本橋をこしらえました。みんなおおよろこびで、わたりました。

金太郎は、ほんとうに、ほがらかでげんきな子どもでした。

あしがらとうげの南のほうに、おとめとうげというとうげがあつて、そのちようじょうには、金時ふみまたがり石という、大きな石があります。金太郎が、くまや、さる、うさぎなどといっしょにあそびにきて、またがつてあそんだ石だということです。

金太郎のおかあさんは、金太郎が、まだあかちゃんのとくに、おとうさんがなくなつたので、あしがら山の山おくにすんで、金太郎が、つよいりっぱな人になるようにと、いっしょうけんめいそだてていたのだということです。みなさんは、五月五日のたんごのせつくに、金太郎がくまとすもうをとっているにんぎょうや、こいにのつてたきをのぼっているにんぎょうが、かざられてあるのを見たことがあるとおもいます。

「うちの子も、金太郎さんのように、じょうぶに、つよくなつてもらいたい。」

おとうさん、おかあさんが、そうねがつてかざるのです。

ところで、公時は、のちには、金時ともかきました。金時は、みなもとのらいこうがなくなると、うまれこきょうのあしがら山にかえつてきて、ここで一生くらしたということです。

ひみつの曲

みなもとのらいこうのおとうとのまごに、みなもとのよしみつという人がいました。げんぶくといって、おとなになる式を、しらぎ(新羅)明神のおやしろでおこなったので、しんら(新羅)さぶろうよしみつといいました。

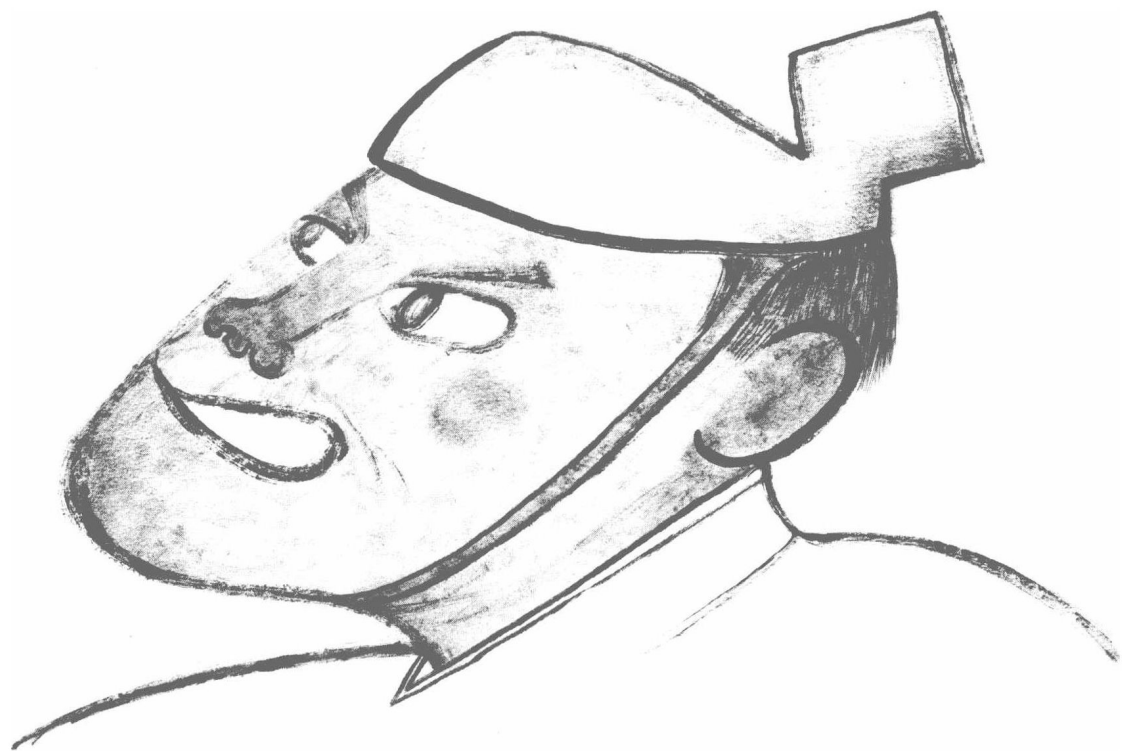
よしみつは、京のみやこの、国の役所や天子さまのおすまいのある、ごしよをまもる役めについていました。

あるとき、むつの国(いまの岩手県)へいくさにでかけている、にいさんのはちまんたろう。よいえから、てがみをもらいました。それには、てきがつよくて、くるしいいくさをつづけていると、かいてありました。

よしみつは、すぐでかけていって、にいさんをたすけてあげたいとおもいました。そこで、いくさにゆかせてくださいと、役所へねがいました。ところが、なかなかゆるされません。よしみつは、いつゆるされるか、それまでまっではいられないとおもいました。そこで、ゆみのつるをいれるふくろを、役所のかべにかけて、それを、

「お役を、やめさせていただきます。」

という、ことばのかわりにして、けらいをつれて、いそいでむつの国へむかいました。みやこからでてまもなく、おうみの国(いまの滋賀県)の、かがみの宿のちかくまできた



ときです。かりぎぬといううわぎに、青い色のはかまをはき、馬^{うま}にのった、わかい男が、あとからおいかけてきました。

「だれだろう。」

と、おもっていると、それは、とよはらのときあきという、やはりごしょにつかえている、音楽^{おんがく}をする人でした。よしみつは、ふしぎにおもってたずねました。

「あなたは、どうしてこんなところへおいでになったのですか。どちらへゆかれるのですか。」

すると、ときあきは、

「わたくしは、あなたのおともをしたいとおもって、まいったのです。いっしょに、ゆかせてください。」

と、こたえました。よしみつは、

「こんど、わたくしたちが、むつの国へいくのは、ただのたびではありません。いくさに

ゆくのです。ですから、おつれするわけにはまいりません。」

と、ことわりました。けれども、ときあきはかえりません。よしみつのけらいたちのなかにはいつて、たびをつづけているのです。

ときあきは、よしみつがならっていた、音楽おんがくの先生の子どもです。先生の子どもをおいかえすわけにもいかないので、そのままにしていました。

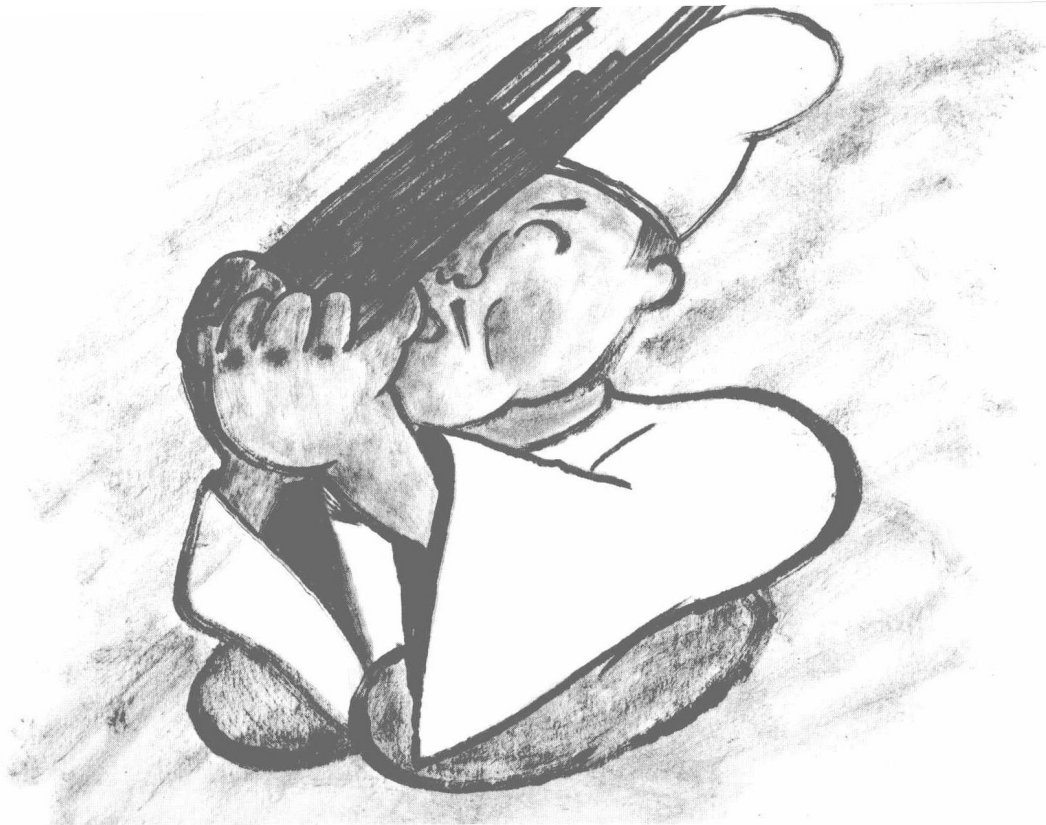
よしみつは、ちいさいときから音楽おんがくがすきで、ときあきのおとうさんの、とよはらのときもとについて、しょうのふえをならいました。しょうのふえは、十七本のほそい竹のくだを、まるいつぽにさしこんで、そのよこにふき口をつけた楽器がっきです。

やがて、よしみつは、しょうの名人となりました。

ときもとがなくなるとき、むすこのときあきは、まだおさなくて、とよはら家けにむかしからつたわってきた、ほかの人にはおしえない、ひみつの曲きょくをさずけることができました。せんでした。

ときもとは、じぶんとともに、その曲きょくがなくなってしまうのをざんねんにおもいました。そこで、いちばんすぐれている、いちばん氣きにいったでしのよしみつに、このひみつの曲きょくをおしえました。

ときあきは、おとうさんがいなくても、いっしょうけんめい、しょうのふえをならいました。そして、いまは、りっぱなわものになり、しょうのふえも、たいそうじょうずになり、すぐれたふきてになりました。



おとうさんが、とよはら家のひみつの曲を、
よしみにつたえたというのを知って、ぜひ、
それをまなびたいとおもっていました。する
と、きゅうに、よしみが、いくさにむかっ
たというのです。いまあわなかったら、生き
てあうことができるかどうか、わかりません。
そうおもうと、じっとしていられずに、あと
をおってきたのです。

けれど、よしみは、はやくいって、にい
さんをたすけたいという気もちでいっぱい
でした。ときあきのころのうちなど、気がつ
きません。どんどん、東へ、東へと、道をい
そいでいきました。

ときあきのほうもまた、よしみつのいそぐ
ころのうちをおもうと、おしえてください
などとはいいだせませんでした。いつか、お
しえてもらえるときがくるだろうと、どこま
でも、どこまでも、ついていきました。

とうとう、いくつも国をこえて、さがみの国のあしがら山にきてしまいました。

その夜は、この山の上で、野宿のじやをすることになりました。よしみつは、とうげにたつて、

「やっと、東国までくることができた。にいさんのところまで、あとひといきだ。」

と、ゆくての空をながめました。大きなまるい月が、山のふところから、のぼっていくところでした。

ふと、よしみつは、ときあきが、なぜついてくるのか、そのわけに気がつきました。

「そうか、そうだったのか。」

ひとりうなずくと、けらいにいつけて、みんなの野宿のじやの場所ばしょからはなれた草の上に、たてを二まいしかせました。それから、ときあきをよんで、むかいあってすわりました。よしみつは、しずかに矢やいれの中から、かくふをとりだすと、ときあきのまえにおきました。

「これは、あなたのおとうさまから、わたくしにさずけられた、お家いえにつたわる、ひみつの曲きまのふです。あなたが、はるばる、わたしのあとをついてこられたのは、このためでしょう。しょうのふえは、おもちになりましたか。」

「はい、もってまいりました。」

ときあきは、ふところから、ふえをとりだして、よしみつにわたしました。

月は、高くのぼって、あたりをあかるくてらしていました。

